九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Structuring the Process of Disaster Relief Nurses' Cognitive Evaluation of Stress

松清, 由美子

https://doi.org/10.15017/1831398

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（看護学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名：松清　由美子

論 文 名：Structuring the Process of Disaster Relief Nurses' Cognitive Evaluation of Stress
（災害救援看護者のストレスの認知的評価から活動後の適応・不適応に至るプロセスの構造化）

区　　分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

ストレス理論(Lazarus & Folkmann, 1984)を基に研究の概念枠組みを作成し、災害救援看護者の災害救援活動におけるストレスの認知的評価から活動後の感情の変化、長期にわたる適応・不適応に至るまでのプロセスの構造化および性別による違いを明らかにする。

【研究の概念枠組み】

救援活動中のストレスの認知的評価(第 1 段階)、二次的評価と対処(第 2 段階)、再評価と適応・不適応(第 3 段階)の 3 段階に分け、各段階に影響を与える要因を想定し作成した（図 1）。

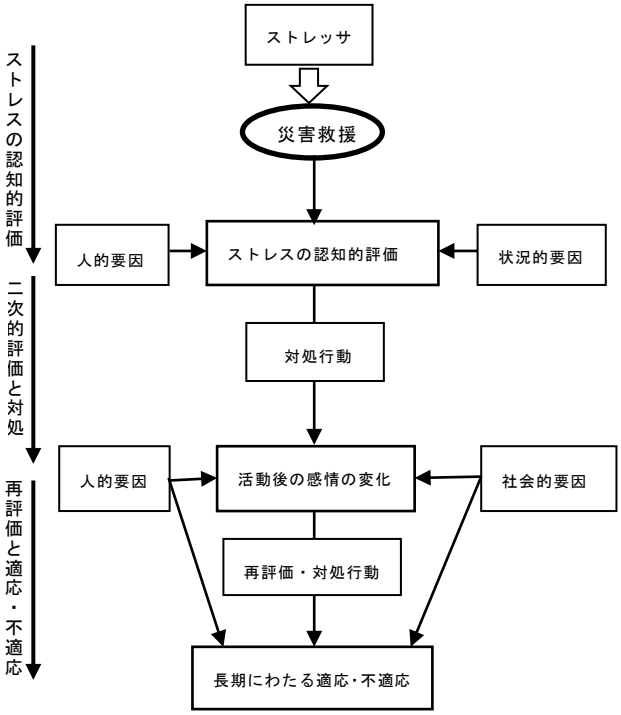

図 1. 研究の概念枠組み

【研究方法】

1. 調査対象

東日本大震災の被災県を除く DMAT(Disaster Medical Assistance Team)指定医療機関 167 施設に所属し救援活動を行った看護者 535 名

2. 調査方法及び調査期間

無記名自記式質問紙による調査研究

2014 年 4 月～2014 年 7 月

3. 調査内容

1)第 1 段階：ストレスの認知的評価(20 項目)

目的変数：ストレッサー

説明変数：基本属性、救援活動経験、救援活動参加の動機、対処行動特性(コーピング尺度：尾関友佳子,1993)、派遣組織、救援活動の時期・内容

2)第 2 段階：二次的評価と対処(14 項目)

目的変数：災害救援者のチェックリスト(加藤寛,2006)

説明変数：救援活動中の対処行動、救援活動の自己評価、対処行動特性(コーピング尺度)
救援活動の正当な他者評価、救援活動中の支援体制、救援チ-ム内の人間関係

3)第 3 段階：再評価および適応・不適応(10 項目)

目的変数：IES-R (Impact of Event Scale-Revised)(飛鳥井望,1999)

説明変数：救援活動後の対処行動、対処行動特性(コーピング尺度)

4. 解析方法：目的変数と説明変数との関連を重回帰分析にて検討し、構造モデルの作成には SEM(Structural Equation Models with observed variables)を使用した。尚、統計解析には JNP Pro11 および Stata/MP13.1 を用いて行い、有意水準は 5%未満とした。

5. 倫理的配慮：九州大学医系地区部局臨床研究倫理審査委員会にて承認(番号：26-24)を得た。

【結果】

44 都道府県 167 施設、1011 部の調査票配布、回収数 544(53.8%)、有効回答数 535(52.9%)であった。対象者の平均年齢は 42.8±8.3 歳、女性 393 名(73.5%)、男性 140 名(26.1%)、未婚者 224 名(41.9%)であった。救援活動の時期は、発災後 7 日以内が 127 名(23.7%)、救援活動の内容は避難所における活動が 330 名(61.7%)であった。

ストレスの認知的評価(0～24)の平均は 10.4±4.8 であり、ストレッサー8 項目のうちストレスとして「強く感じた」と回答した者が最も多かったのは「悲惨な光景」184 名(34.4%)であった。活動後の感情の変化は災害救援者のチェックリスト(0～11)の平均が 1.8±1.3 点であり、救援活動による心理的影響が強く出ていると判断できる 3 点以上は 146 名(27.3%)であった。IES-R (0～88)の平均は 7.0±10.8 で、PTSD ハイリスクである 25 点以上は 38 名(7.1%)であった。

各段階の重回帰分析を基に、SEM を用いて災害救援看護者のストレスの認知的評価から活動後の不適応に至るプロセスの構造モデルを作成した（図 2）。

構造モデルの内生変数はストレスの認知的評価と活動後の感情の変化、長期にわたる不適応であった。影響要因である外生変数は、ストレスの認知的評価には性別(女性)、婚姻(既婚)、救援活動の時期(発災後 2 週間以内)、救援活動内容(避難所での活動)、対処行動特性(問題焦点型)であり、活動後の否定的感情は、正当な他者評価、活動中の対処行動(冗談を言って笑う)であり、長期にわたる不適応には、否定的な自己評価、対処行動特性(情動焦点型)であった。構造モデルの適合度は、GFI0.888、RMSEA0.064、SRMR0.036 であった。また、性別により構造モデルに大きな相違が認められた。

女性の構造モデルは、全体の構造モデルとほぼ同じであったが、第 3 段階に周囲との関わりを示す対処行動が不適応に対する負の要因として明らかになった。一方、男性は、ストレスの認知的評価に救援活動内容(救命活動)、活動後の否定的感情と長期にわたる不適応に否定的な自己評価でのみであった。適合度は、女性が GFI0.909、RMSEA0.064、SRMR0.032、男性が GFI0.955、RMSEA0.077 SRMR0.050 であった。

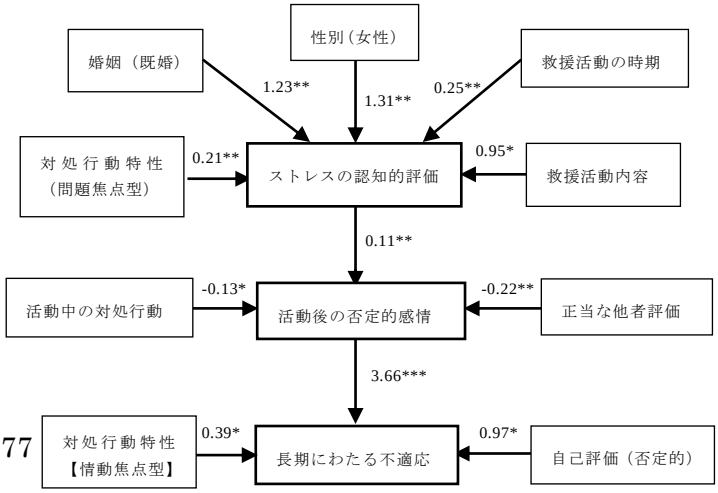

図 2. 災害救援看護者のストレスの認知的評価から活動後の不適応に至るプロセス n ＝535

SEM(Structural Equation Models with observed variables)　*p<0.05　**p<0.01　***p<0.001

【結論】

災害救援看護者の救援活動によるストレス認知的評価から活動後の不適応までのプロセスは Lazarus & Folkmann のストレス理論に基づいて構造化することが出来きた。さらに、性別による構造モデルの違いが明らかとなった。